

京都教区 田中健一名誉司教 略歴

1927. 8 .31	愛媛県宇和島市にて誕生
1945. 8 . 9	原子爆弾被爆 (長崎/17歳)
1946～1952	大阪・東京大神学院 (哲学・神学)
1951.12.21	司祭叙階 (高松/24歳)
1952～1955	ローマ・ウルバノ大学院 (教会法)
1956～1958	少年の町 (アメリカ・ネブラスカ)
	シカゴ・ロヨラ大学院 (児童福祉)
1958～1964	大阪教区 (夙川、甲陽園、園田)
1964～1970	高松教区 (桜町、三本松、長尾)
1970～1976	高松教区 (教区事務所、大島)
1976. 9 .23	司教叙階 (京都/49歳)
	21年間、京都司教・日本司教協議会 諸宗教対話・交流・協力を担当
1997. 6 .15	健康上の理由で司教を引退 京都教区名誉司教となる (69歳)
2021. 7 .29	帰天 (93歳)



田中健一司教様
御父のもとで安らかに



「神に栄光、神に賛美」を
モットーにして

京都司教 パウロ 大塚喜直

ライムンド田中健一名誉司教様は、本年7月29日、静かに天国に旅立たれました。8月31日の誕生日に94歳を迎えられる直前でした。また今年の12月21日で司祭叙階70年の記念でした。田中司教様は21年間、教区長として、教区内外のさまざまな事柄に神経と体力を注ぎながら司牧者として重責を果たされました。田中司教様のご奉仕に深い感謝を表したいと思います。

■長崎での被爆体験

田中司教様は2001年、司祭叙階金祝・司教叙階銀祝を記念し、自叙伝『主とともに七十四年』を著されましたが、その中に長崎小神学校在学中の被爆体験が綴られています。「私は原子爆弾を受けたにもかかわらず、一命を取り留めた。そのことから、神の特別のお計らいを感じない訳にはいかない。どんな困難に遭遇しても、それに打ち勝って司祭となり、原子爆弾で亡くなった友人の分まで一生懸命に神の道具となって、み国のために働くとう強く決心した」(40頁)。



泰星中学 (小神学校) 当時

そして、1951年12月21日、高松カトリック教会で司祭に叙階され、翌1952年3月、東京カトリック神学院の卒業式での来賓田中耕太郎氏(最高裁判所長官)のことが胸を打ったとあります。「皆さんは目に見える卒業証書は手渡されないが、『行きて万民に教えよ』という神からの素晴らしい卒業証書が手渡されたのです。そして、その卒業証書には、『ナザレトのイエス』という見えないサインが記されているのです」(47頁)。

自叙伝では、被爆体験から奇跡的に一命を取り留め、ようやく司祭となられた田中司教様が、ローマ・アメリカへ留学し、大阪教区・高松教区で20年働かれた後、京都教区司教の任命を受け、2代目京都司教として21年奉職され、教区長引退までの74年の半生を振りかえっておられます。神に召され、キリストの司祭と

して生涯を捧げられた思いと、田中司教様の「私の着地」への思いが綴られ、「神に栄光、神に賛美」と締めくくられています(239頁)。

戦後の生活の苦しい時代に司祭を志した田中司教様の司祭生活は、「目に見えない卒業証書」を手にしてはじまったのだと、深く感動いたしました。



1951年12月21日 司祭叙階式
3人の新司祭の左側が田中司教
高松カトリック教会

■京都教区ビジョン『社会と共に歩む教会』

1976年9月23日に司教叙階され、京都教区長として田中司教様の21年間は、古屋司教様の戦後の教区創設発展期

から、充実刷新期という時代でした。当時の世界のカトリック教会は、第二バチカン公会議の精神がどのように根づいていくかという大切な時代でした。日本司教団も、布教という宣教意識から社会への福音宣教へと転換していく、一つの大きな時代の変遷期を過ごしていました。

田中司教様は1981年11月23日、京都教区創立44年目にあたり、2年半かけて検討された京都教区のビジョン『社会と共に歩む教会』を発表されました。教区民が共通のビジョン(方針・展望)を持つことによって宣教するということは画期的なことでした。ビジョン宣言文には次のように述べられています。「こうして、私たち京都教区民は、真剣に祈り、聖霊の導きを熱心に乞い求めながら意見交換を重ね、教区民として共通のビジョンを持つことによって、神の国がよりよく、よりふさわしく実現され得ると考え、そのために努力することを決意しました。そして、私たちはこの社会の中にあって、神とすべてのものの前に謙虚にひざをかがめ、愛と正義、信仰と希望に基づき、一人一人を大切にし、また、すべてのものを尊重しながら、ともに歩んでいかねばならないと考え、『教会は常に社会とともに歩むものである』という結論に達したのであります。これは、教会中心に考えるのではなく、社会を中心にして、「教会が社会の隣人になる」

という意識転換の上に成り立っていました。第二バチカン公会議の教えを実践していくために、京都教区はその自らの宣教のビジョンとして、教会と社会の関係を問い直し、特に弱い立場に置かれた人々への関わりを最優先に行う宣教の基本方針を定めたのでした。

そして、日本司教団が1984年「日本の教会の基本方針と優先課題」を発表し、1987年の第一回福音宣教推進全国会議(NICEI)の開催が提案されたとき、田中司教様は京都教区に会議を招致されました。日本の福音宣教の転換期に京都教区が重要な発信地となるべく、相当に大変な準備が行われましたが、京都教区として大変誇らしいことでした(残念ながら、わたしはローマ留学中で会議には参加できませんでした)。



1980年アド・リミナ
聖ヨハネ・パウロ2世と共に バチカンにて



田中司教の紋章

京都教区の4府県とダビデの星が描かれている モットーは「神に栄光、神に賛美」

■諸宗教対話

田中司教様は司教団の中では、諸宗教対話の分野で重要な役割を果たされました。古都奈良・京都のように多くの日本の伝統宗教の聖地本山を抱える京都司教として、バチカンの諸宗教対話評議会の日本窓口として、日本宗教界での対話環境作りに大きく貢献なさいました。特に、1986年、聖ヨハネ・パウロ二世教皇が呼びかけたアシジでの「平和の祈りの集い」に参加した山田恵諦天台座主殿下のイニシアチブで始められた「比叡山宗教サミット平和の祈りの集い」は、そのすばらしい実りであり、今年も第34回が開催されました。諸宗教対話の活動は平和のための祈りにとどまらず、貧困、人権、環境問題など、宗教者が連帯して活動することにも尽力され、世界宗教者平

和会議(WCRP)日本委員会のメンバーとしても活躍されました。また、キリスト教と仏教、つまりヨーロッパと日本の靈性交流の面では、1979年から始まる「東西靈性交流」(隔年毎にヨーロッパと日本で開催され、禅僧と観想修道会を中心として交流)の日本側準備を担当されました。

■キリシタン関係

田中司教様は、キリシタン関係の事業にも熱心に取り組んでくださいました。都(ミヤコ)であった京は歴史的に政治文化の中心であり、キリスト教も畿内での隆盛と迫害を迎えましたが、京都教区の京都府、滋賀県、奈良県、三重県にも多くのキリシタンゆかりの地があり、田中司教様は各地の殉教地を整備し、顕彰活動を盛んにしてくださいました。京都元和の大殉教を記念する「元和殉教の碑」や、キリシタン大名内藤ジョアンの居城跡入口の顕彰碑の設置。細川ガラシア夫人隠棲の地、味土野での「ガラシア祭」。滋賀安土セミナリヨ跡の整備とセミナリヨ祭。奈良宇陀の福者ユスト高山右近の受洗地沢城跡での「右近こどもまつり」など。1996年11月23日には、京都ノートルダム女子大学ユニソン会館において、『日本26聖人殉教400年祭in京都』を開催されました。

■感謝

主イエス・キリストは、天の御父からご自分に任された人々に向かって、こう言われました。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と。田中司教様はこの主のことばどおり、この世でのすべての重荷をとかれ、永遠の安息に入ら



2011年12月7日 司祭叙階60周年記念ミサ
教区司祭団と共に カトリック河原町教会

れました。いのちの与え主である神が、神のため、教会のために生涯を捧げられた田中健一名誉司教様に、復活の恵みをお与えくださいますよう、京都教区の皆様とともに、祈りをささげたいと思います。

田中司教様とともに



京都教区司祭 村上透磨

田中司教様の帰天にあたり、司教様の思い出を一筆書くように求められました。兄の故村上眞理雄神父がよく、司教様について言っていた冗談は「背広に袴を着けたような司教様」という言葉でした。ご存じのように、司教様はとても几帳面で、メモ魔と言われるほどでした。もし、司教在任中の手帳があれば、教区のために資料として残しておいていただきたいと思います。

教区は司教の動きや指導を中心に動きます。教区時報もそのようなことを考慮しながら、京都教区の歴史の一資料とし



2015年8月31日 米寿記念のミサ
教区司祭団と共に カトリック高野教会

心に生きた証となるのが、教区共同体のあるべき姿だと思ふのです。

田中司教様在任中、実に多くのことが、教区にも日本の教会にも起きました。教区としては教区ビジョン作成と教区の50周年、そして新しい福音宣教共同体への出帆です。そこに、第一回福音宣教推進全国会議(NICEI)の京都開催が飛び込んできました。この時の司教様の功績は、まずNICEIを開催地として受け入れられたことでしょう。NICEIは宣教司牧評議会を中心に、司祭、修道者、信徒をあげての恵みに満ちた活動であったと思います。京都教区は「教区ビジョン―社会と共に歩む教会」と、「NICEIのビジョン―開かれた教会」を同一路線と認め、これに取り組みました。あれからもう30年以上になり、ビジョンもNICEIも遠くなり、知っている人も少なくなりました。

田中司教様、ありがとうございました。天の先輩たちと共に、どうぞ安らかに休みください。そして私たちをお護りください。私ももうすぐ参ります。諸先輩たちによりしくお伝えください。司教様のかげを慕いて。